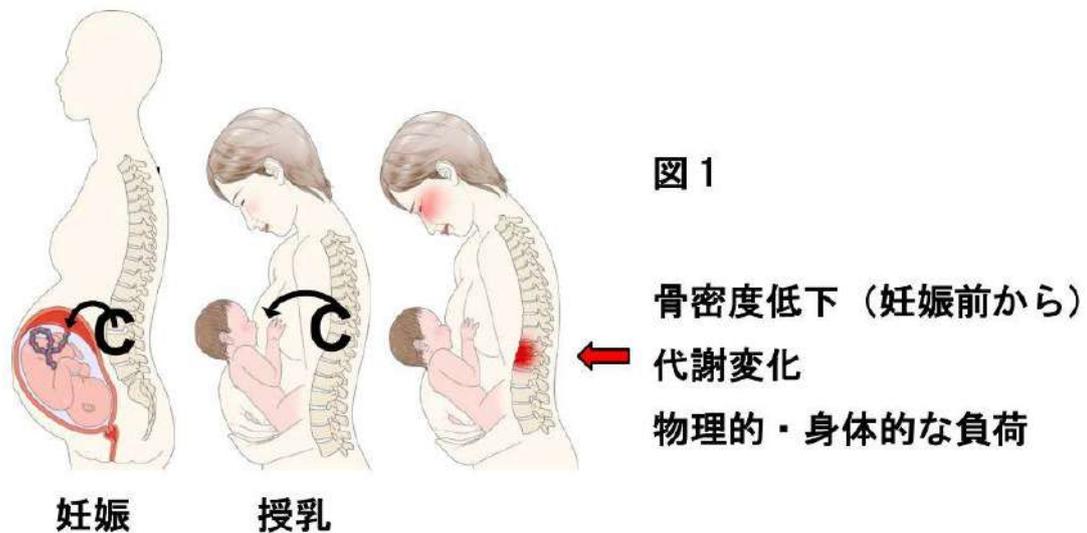


妊娠・出産・授乳の前には骨密度検査を
— 出産後骨粗鬆症・椎体骨折の予防のために —

慶應義塾大学は、出産後に発症する椎体骨折（背骨の圧迫骨折）を起こす原因として、代謝性や内分泌学的疾患を伴わない原発性の骨密度低下が予想されることを報告した。

今回の調査で、出産後、ごく稀に背骨の骨折（椎体骨折）を起こす例があることが明らかになりました。出産後に椎体骨折を起こした 11 名の患者について調査を行ったところ、一般に骨粗鬆症の原因となる代謝性疾患や内分泌学的疾患への罹患を認めないにもかかわらず、高齢の骨粗鬆症患者に見られるのと同程度の骨密度減少を認めました。この 11 名は、骨折を起こすまで全て完全母乳で授乳しており、いずれも出産後 3 ヶ月以内に骨折を起こしていました（図 1）。



一方、出産を目的に慶應義塾大学病院婦人科を受診した 79 名に対し、出産後に脊椎の X 線検査および骨密度検査を行ったところ、椎体骨折は 0 人で、骨折を起こした 11 名の方に比して骨密度は有意に高いという結果が示されました。79 名のうち 34 名は完全母乳で授乳していましたが、骨折を起こした例とは異なり、これらの例では骨密度の低下は認められませんでした。

また、骨折を起こさなかった例につき、完全母乳で授乳されている 34 名とそれ以外（完全ミルクあるいは母乳・ミルク混合）の 2 群で比較したところ、骨密度に有意差はありませんでした。

次に、骨代謝マーカーの測定結果を 2 群間で比較したところ、骨吸収マーカーについては完全母乳群で有意に高く、骨の代謝サイクルのうち、古い骨を破壊する機能の活性度が完全母乳群で高いことが示されました。一方、骨形成マーカーについては両群間で有意差がなく、新しい骨を形成する機能の活性度は同等であることが示され、ミルクを用いた授乳と比較し、完全母乳では骨の形成に対し破壊吸収が優位となりやすい傾向があることが推測されました。

これらのことから、出産後の骨折は、授乳に直接的な原因があるのではなく、出産前の骨密度低下が決定的な原因となっていると考えられます。骨折が起こったケースでは、既に骨密度が顕著に低下した状況にあった産婦が授乳を行うことで、骨吸収機能の亢進・骨代謝状態の変化を招き、そこに赤ちゃんを抱きかかえるなどの物理的・身体的な負荷が加わったことで骨折に至ったと推測されました。

本研究成果は 2019 年 5 月 13 日、学際的総合ジャーナル『Scientific Reports』（オンライン版）に掲載されました。（日文发布全文 <https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2019/5/14/190514-1.pdf> ）

文 JST 客观日本编辑部